

『フェルムとフェルマー』

—フェリア・シリーズⅢ—

SET I 「俺の厄日」

思うに毎日々々同じオーダーばかり、たまには違う物でも頼もうなんて考えたのがいけなかったのかも
しれない。やっぱり、素直にいつものミックスブレンドにしておけばよかった…。

事の起こりは日頃の不摂生のせいだった。今朝起きてみるとなんとなく胃が重い。まあ、よくあることなの
で放っていたんだが、おかげさまで朝から何も口に入れられなかったんだ。普通なら胃薬でも飲むところなん
だらうけど、生憎と俺は現代医療の薬の類は信用しないことにしている。結局はいつものようにここに来て
からもとてもコーヒーをオーダーする気になんてなれなかったんで、日頃は開いたこともないメニューから
名前だけで選んでオーダーした訳だ。

「樫羽さんがミックス以外の物をオーダーするなんて、本当に珍しいですね。」

「まあね、おかげさまで少しばかり後悔しているよ。」

「そのようですね。」

この喫茶店「梨亜夢」のアルバイトの麻里ちゃんがクスクス笑いながらカウンターの向こうへ消えていく。
彼女が笑っている原因、そして俺の後悔の原因が、俺の真向かいで紅茶なんかを呑気に飲んでいる。

「あたし、ミズリがハイビスカスなんて飲むなんて知らなかったな。」

肩口まで伸びたストレートの髪の毛に少し大きめのピンクのトレーナーで、ちょっと目がきついのを除け
ば、まあまあそれなりの可愛い女の子だと思う。ただし、口は思いっきり悪い。それだけは俺が間違いなく
保証する。この娘の名前は坂上希夜、俺よりたしか二つ下で妹のクラスメイト。そして、ここ梨亜夢の常連
でもある。さらに付け加えるなら、俺のことを呼び捨てにする数少ない存在でもある。

はっきり言って俺はこの希夜の相手をするのが苦手だ。いつも、いつの間にかに希夜のペースに巻き込
まれていて、しかも大体がろくな目に合わない。そういうことは俺の主義には大いに反している訳で、でき
ることであれば希夜とは関わり合いを持ちたくないというのが本音だったりする。

「まあな…。」

俺は目の前の水を一気に飲み干すと、ジロリと希夜の顔を睨みつけた。こんなことで大人しくなるような
奴ではないことはよく分かっているつもりだが、何かしないとまた彼女のペースに巻き込まれそうで怖い。
「そんな怖い顔をしないでよ。でね、一度その彼女に会って話を聞いてやって欲しいんだ。ミズリなら絶対
に彼女の力になってやれる筈なんだから。」

力になれると思う…なんていう弱い感じではなく、力になってやれる筈…という力強い断定。希夜が俺
のことをどう思っているかは知らないが、大きな誤解があることだけは間違いのないだろう。

「キャンが俺のことをそうやって高く評価してくれるのは嬉しいが、俺は厄介ごとに首を突っ込む気はこれ
っぽっちもないんでね。」

「なんでよ、どうせ暇なんでしょ？」

「主義に反するのさ。」

俺はポンと希夜の頭を軽く叩くと、ハイビスカスのグラスを持ってカウンターの方へ移動した。いつものこ

とだがこんな時間だとカウンターには誰も客はいない。

「たまには遊んであげればいいのに。」

さっきからずっとカウンターの中で新聞を読んでいたマスターが、俺がカウンターに来ると同時に顔を上げる。どうやら俺と希夜のやり取りを聞いていたらしい。そのまま新聞をたたむと、水差しを持って俺の前にやってくる。

「マスター、俺ってそんなに暇そうに見える訳？」

「ふーん、来る日も来る日も午後になるとここに入り浸っているのは、暇で暇で他にすることがないからだと思っていたんだけど、そうじゃないとでも言いたい訳なんだ。」

「マスター、貴重な常連にそりゃないでしょ。」

「でもね、実際のところいつも不思議に思ってたよね。働いているようには見えないし、学生って訳でもないんだろう？いい加減そろそろ何者なのか教えてくれないんじゃない？」

参ったなあ、マスターが俺の正体を知りたがっているのは気づいていたけど、まさかこんな風に面と向かって言われるとは思わなかった。

「そうそう、マスターもそう思うでしょ。真衣に訊いたって教えてくれないしさ、ミズリって総じて謎が多すぎんよ。」

当たり前だ。俺がどんな仕事をしているのかは、妹の真衣には誰にも言わないように堅く口止めをしてあるんだ。真衣だってそんな莫迦じゃないから、それが何を意味しているかはよく理解している。

「ま、いいじゃないですか。今ここにいる俺がすべてだと思ってよ。」

そうマスターに誤魔化したつもりだったけど、マスターは一言も言わずにニヤニヤしている。代わりに背後から希夜が不満そうな声を投げつけてくる。

「ちえっ、いつもそれで誤魔化すんだから。あたしはそんなんじゃ納得しないからね。」

振り向くと希夜はほっぺたを膨らませて首を大きく横に振っている。一応は抗議の姿勢を見せているつもりだった。

俺は仕方なしに肩をすくめてマスターの方に振り返ると、マスターも黙ったまま首を横に振っている。

ちえっ…。

「とにかくさ、明日その娘を連れてくるから。どうせ2時にはここに来てるんでしょ？」

「ああ、来ていると思う。」

「分かった。じゃあ、また明日ね。」

希夜はでっかいズタ袋を肩から担ぐと、左手を軽く振りながら店から出て行った。テーブルの上にはいつの間に出したのかちゃんと百円玉が4枚乗っかっている。これは昔からの彼女の癖で、わざとレジでお金を払わない。いつもテーブルの上にお釣りの必要がないようにぴったりと置いていく。

麻里ちゃんがカップを片付けながら、気にした様子も見せずにそれを黙って回収するとレジに打ち込んでいる。

「結局は引受けたって訳だ。」

「誰のせいだと思っているんですか。仕方ないでしょ、この場合…。」

「そりゃ、悪かったよ。でも、俺も瑞理ちゃんの正体を知りたがっているということだけは忘れないで欲しいな。」

「ええ、心しておきます。」

そう言って、俺はフーッと大きく息をついた。

実のところを言うと、俺はこれでもとある薬品系の研究所で所長なんてものをやっている。ま、肩書きだけで、実際には何もやってはいないんだけどね。俺の親父さんっていうのが、昔から生化学の研究をやっていて、遺伝子操作だのホルモンの合成なんてのをやっていたらしい。ただ、そういうのはあまり金にはならなかったようで、金のためには少々やばい仕事なんてのも引受けていたみたいだった。

そのせいもあって俺たち兄妹は小さい頃から友だちを家に呼ぶなんてことができなかった。しかも、何と言っても父親の職業を胸を張って他人に言えないのが一番つらかった。そういう状況だったから、俺も真衣も自然に友人との間に距離を置くことを覚え、余計に友人を減らしてしまったような気がする。結局、こういうところに残るのは好奇心旺盛な奴らだけで、俺は親父さんが死んだときに初めてそのことを思い知ることになった。

今にして思えば、なんでそんな親父さんの跡を継いでしまったのか、その方が自分のことながら不思議で仕方がなかったりする。真衣のためには止めてしまったほうがいいとは思うんだが、現在は俺たちだけの問題ではないんで、すぐに研究所を止めるという訳にもいかない。

ちなみに母親は真衣を生んですぐに他界したとかで、俺も母親の顔はほとんど覚えていない。つまり、真衣にとっての肉親というのはこの俺しかいないことになる。それだけに余計に真衣が可哀想で仕方がない。

「いっらしやいませ〜。」

麻里ちゃんの高く澄んだ声が梨亜夢に響く。制服の女子高生が二人ほど入ってきた。そのキンキンした声でそれまで静かだった店内が一変して雰囲気が変わってしまった。

真衣にもあんな風になんでも言い合える友だちでもいれば、俺もまだ安心なんだが…。俺がこうして毎日のようにここに入り浸っているのに比べ、真衣は学校へ行く以外は一步も家を出ようとはしない。まあ、理由はなんとなく分かっているんで、何も言わないようにはしているんだけど…。

俺がなんでここへ毎日のように入り浸っているのかというと、俺は元々が文系の人間だから生化学なんて言われてもチンプンカンプンな状態で、実際の研究はすべて所員がやってくれるので、基本的に俺がやれることが何も無いという情けない理由だったりする。で、せめて事務くらいはやろうと思うのだが、ほとんどの計算は研究所のオフコンがやってしまい、俺の出番はこれっぽっちも無かったりする。

そんなもんだから、どうしたって家にいずらくなってしまい、一日の大半をここで過ごすという妙な習慣が身につけてしまったのだ。どうせ真衣のほうも理由は似たり寄ったりなんだろうけど、真衣の場合は俺と違って外へ出ずらいだけなんだろうな。

「ところで、今度例のメンバーでタウン誌を作るんだけど、瑞理ちゃんも何か書いてくれないかなあ。題材は何でもいいから、原稿用紙に3枚くらいでさ。瑞理ちゃんもこういうのなら得意だろ？」

「ええ、まあ…。」

例のメンバーというのは、マスターの学生時代からの友人たちで、水曜日ともなるとここに集まってきて騒いでいる。

「今度の火曜日まででいいんだろ？」

「たまには水曜に来てくれよ。」

「気が向いたらね。」

普段はほとんど客も来なくて静かなこの店の午前中も、水曜日だけは連中のせいで騒がしくてたまらない。そのせいで俺は水曜日だけはあまりここへ近寄らないことにしていた。

「じゃ、そろそろ帰るよ。」

「今日は早いじゃないか。」

「まあね。」

俺は伝票を掴むと、マスターにしか分からないようにさっき店に入ってきた女の子たちを指差した。なんか片方の子が一方向的に喋っているようで、もう一人が必死になだめているようにも見える。

「また来るよ。」

素早くレジに入った麻里ちゃんに五百円玉1枚と伝票を差し出した。

「五百円ちょうどですね。ありがとうございました。」

「あ、そうか…。」

今日はミックスじゃなかったんだっけ。無意識に出していた右手を慌てて引っ込める。

背中に麻里ちゃんのクスクス笑いを聞きながら、俺はゆっくりと梨亜夢を出た。やっぱり慣れない物をオーダーしてはいけない。なんか余計な恥を書いたような気がする。

「うわっ！」

あまりにも麻里ちゃんの笑い声を気にしていたもんだから、梨亜夢から出てから何歩も歩かないうちにいきなり路地から飛び出してきた少年をよけ損ねて、俺はまともにぶつかって転んでしまった。

まったく、本当に今日は厄日だ。

「す、すいません。」

お、意外と素直だな…と思ってその少年の顔を見ると、アメリカ人？フランス人？少なくとも日本人ではないことだけは間違いないという感じのどこの国だかよく分からない顔立ち。その割には上手な日本語を使っている。まあ、ハーフというのも珍しくはないけどね。

あまりジロジロ相手の顔を見たせいか、少年はスッと立ち上がるとペコッと頭を下げたまま行ってしまった。もしかすると気に障ったのかもしれないな。その少年があまりにも印象的だったせいもあり、ポーズとその少年の後姿を見ていると、なにやら騒がしい団体さんが俺の脇を通り抜けていく。なんとなく今の少年を追いかけているって雰囲気だ。

普段の俺なら誰が誰に追いかけられようと知ったことではないのだが、今の少年の瞳がとても気になったのと、その追いかけていった団体さんの中に何人か知った顔を見つけてしまったことで、やめておけばいいのについつい好奇心が心の中に芽生えてしまった。

何回も繰り返すとしつこいと言われそうだが、つくづく今日は厄日だと思う。

その知った顔というのが、とある製薬会社でうちと同じような新薬の開発をやっている研究所の所員で、学会でも何度か会ったことがあるという程度の奴だった。しかし、元々この男がうちの親父さんもかなり気に入っていたという男でなかったら、はたして俺の好奇心がここまで大きくなったかどうかは責任がもてない。しかも、俺はこの男の悪い噂も何故か知っていた。

とにかく俺はその団体の後を追うことに決めた。決めたと言ってもべつに探偵のように尾行しようという訳でもなく、遅れた振りをしてその集団の一番後ろを走っていた。幸い連中は追いかけている少年にばかり気にしていて、俺が途中から増えたことには気づかなかっただけ。あとは俺の顔を知っている数人にばれないように注意すればいいだけだ。

「畜生、見失ったか。しょうがねえ、二手に分かれて捜そう。」

「じゃあ、俺はこっちへ行く。ノリとリョウは俺について来い。残りはそっちを行ってくれ。」

ラッキー！俺の顔を知っている奴はみんな向こうへ行ってしまった。残った連中プラス俺とで右の道を行く。

暫くするとまた十字路へ出た。ここでも三方に分かれようということになり、俺は全然知らない奴と組んで真っ直ぐの道を選んだ。なんとなくだが、最後に一緒になった口ひげにサングラスの男が一番何かを聞きだすのはやりやすいように見えたのだ。まあ、どうせばれて元々なんけどね。

「あの…。」

「なんだ、何か見つけたか？」

「いえ、そうじゃないんですけど…。俺たちが今追いかけているあのガキ、いったい何者なんですか？あんなガキ一人に振り回されているかと思うと情けなくて。」

足の速度を急に緩めて、ゆっくりと俺の顔を確認するように振り返る。俺は一瞬ばれたかと思い、心の中では逃げる用意をしつつ、男の顔から目をそらさないようにグッと耐え忍ぶ。

「そうか、そうなんだよな。うん、分かるよ。お前さんもつらいところだよな。」

は…？予想にもしなかったら反応に少し警戒心が緩み始める。

「だいたい、お前さんとこの先生は何も言わねえもんなあ。俺なんかから見ても、あんたらはよくやってると思うよ。」

なんかずっこけそうになる。いったい、何がどうしたっていうんだ？

「じゃあ、あなたも知らされていないんですか？」

「いやいや、うちの先生はそのへんが違うんだな。俺はちゃんと知ってるぞ。」

その声には明らかに優越感なんてものが混ざっているのがはっきりと分かる。この辺で自分の勤が間違っていなかったことに気が付いてきた。この分だとうまく調子を合わせてやれば、何かを聞き出すことはそう難しくなさそうだ。

男はサングラスを外すと確かめるように周囲を見回し、そして周りに誰もいないことを確認すると、ニヤツと笑って右手で耳を貸せというジェスチャーをする。

「一応は重要機密だからな、誰にも言うなよ。」

あまり高い声という訳ではないのだが、声のトーンをさらに落としてしつこいまでに周囲を気にしているのが分かる。つられて俺まで周りをキョロキョロ見回してから頷いた。

「実はな、俺たちが追っかけているあのガキ、宇宙人らしいぜ。」

は…宇宙人…？

「あ、お前、信じていないだろ。」

「えっ、いえ、そんなつもりじゃないんですけど。」

「いいや、その面は信じてないという顔だ。ま、無理もねえけどな。だけどよお、俺は見ちまったのよ。」

「何をですか？」

「あいつが消えちまう瞬間だよ。ありゃあ、何と言ったかなあ、ほら、そうだ、テレポーテーションとか奴だよ。あいつの身体がスーッと消えてなくなるのをこの目ではっきりと見たんだよ。」

「へえ…。」

俺は適当な相槌を打ちながら、さっきの少年の顔を思い出そうとしていた。たしかに日本人じゃないとは思ったが、まさか異星人とはねえ。でも、そう簡単に信じられる話でもないな。だけど、どうしてあいつがその異星人を追いかけているのかはよく分からない。世間に発表すらせずに極秘の内に解剖でもするというのなら許せない話したが。

まあ、一応訊きたいことを聞き出したわけだし、ボロが出ないうちに早めに退散したほうがよさそうだな。この男なら割と単純そうだから、適当なことを言って逃げるとしますか。

「ああー！ あっち、あっち、あのガキっぼいのが走っていった。」

「なに、ヨシ、挟み撃ちにするぜ。お前はそっちから行け。俺はこっちから追いかける。」

「了解！」

俺は心の中でピースサインを出すと、ペロッと舌を出してこの男の背中を見送った。

SET I 「俺の厄日」

S62. 20. NOV <<H17. 16. OCT>>

SET Ⅱ 「冒険は偶然の中で」

例によって例のごとく一日の進行状況を所員と打合せた後、やっぱり暇になってしまった俺は、どこへ行くあてもある訳じゃなく梨亜夢に来ていた。今日はいつものミックスブレンドをオーダーし、店内にいるのもいつものように俺一人だし、なんとなく落ち着いた気分だった。ただ、麻里ちゃんが俺の顔を見るたびに昨日の俺の醜態を思い出すのか、クスクス笑っているのだけが少しばかり気に入らない。

ま、それもこれもみんなあいつのせいだということにしておこう。いつもなら気に入った本でも読んでゆったりとした午後を過ごす俺だが、今日ばかりは少し生真面目な論文などに目を通してるところだった。そう、昨日のあの少年を追いかけていた張本人である柏木高文のことを調べていたからだ。

しかし、調べれば調べるほどに不思議な奴だということが分かってくる。まず、あいつの専門は植物の生態のはずなんだ。現に今まで動物に関する論文はただの一度だって発表していないし、あいつが専門を変えたなんて噂だって聞いた事がない。その割には風邪薬なんてうちの薬よりいい物を出していたりするんだよなあ…。

その一方で、それらの薬はあいつがどこからかデータを盗んでいるからで研究なんてこれっぽっちもやっていないという黒い噂もあった。ま、どっちでもいいことなんだが。

とにかく、なんでそんな奴が異星人なんてものに興味を持ったのか、そっちの方がよっぽど理解できない。それに、もし本当にあの少年が本当に異星人だとしたら、どこからそんな情報を集めてくるんだらうか。普通はそんな情報がそこらへんに落ちていることなんて考えないぞ。

「何をそんなに難しい顔をしてんだい。原稿なら簡単な文章で構わないんだぜ。」

「いや、そっちは大丈夫だよ。期待して待っていてくれて結構。今日は本業の方で少し頭を使っているね。」

マスターも相当暇なのか自分のカップを持って俺の前にやってくる。

「へえ、瑞理ちゃんの本業ねえ…。ってことは、やっぱり学生なのかい？なんだかさっぱり分からないけど、随分と難しそうなお本じゃないか。」

「まあね、こんなもんで頭を酷使しなきゃいけないんだから、実際楽じゃないよ。」

マスターは一応の誤解とともに満足したらしく、なにやら急に鼻歌なんか歌いだした。ま、俺はべつに嘘はついていないし、勝手に間違える方が悪いんだ。

マスターがいきなり変な歌を歌いだしたもんだから、麻里ちゃんが驚くと同時に懸命に笑いをこらえているのがよく伝わってくる。本当によく笑う娘だ。今回は俺が笑われているんじゃないし、ま、いいか…。

ふと時計を見ると2時5分前。そろそろ希夜が来る頃だなと思い、なんとなく視線を外の通りへ向けて意外なものを見る羽目になった。大きな窓ガラスの向こう側にある小さな花壇。その向こうの通りを歩いてくる希夜。そして…。

問題はその後だ。希夜までは問題ない、いつもの光景だと言えるだろう。その希夜の隣を一緒に歩いている少年…、いや少女かもしれない。とにかく、希夜が連れてきた人物っていうのが、昨日俺がそこでぶつかった、そして柏木が追っかけていたあの少年だった。いや、もしかしたら地球人じゃないかもしれないんだっけ。

昨日、そこで俺とぶつかった時には男の子の格好をしていたし、少なくとも俺は彼の声を聞いて少年だと思ったんだ。だけど、いま希夜と歩いてくるその姿は、顔こそはそっくりだが女の子の格好をしているし、髪の毛も昨日よりいくぶん長めに見えて身体の線などからしてもどう見ても少女にしか見えない。昨日が男装していたのか、それとも今が女装しているんだか…。

「こんにちは～！ やっほー、ミズリ。」

「ああ…。」

なんとなく希夜と一緒に少女に気を奪われて符抜けた返事をしてしまう。力なく右手をあげたものの、目は少女の方に釘付けになっていた。自分でも少しばかりワクワクしてきているのが分かる。

「どしたのよ、なんか元気ないじゃん。昨日話した彼女を連れてきたんだから、もっとシャキッとしてくんなきゃ。」

俺は危うく立ち上がる時にテーブルを動かしてしまい、水をこぼしそうになり慌てて目の前のコップを掴む。

「えーっとねえ、オレンジジュースを二つお願い。」

そして、希夜が麻里ちゃんにオーダーする声が俺の耳に届くまで、そのままの姿勢でずっとその少女を見ていたのである。

「こんにちは。」

なんとなく目が合ってしまう、俺は慌てて椅子に腰を下ろした。

「ミズリ、この娘が昨日話した娘なんだ。名前はフェルマー、日本人じゃないけど日本語はバッチリだからさ。ね、相談に乗ってやってよ。」

「フェルマーです。どうぞよろしくお願いします。」

希夜にきちんと紹介され、挨拶をした時の声。昨日の声とはちょっと違うような気がする。まさか声まで返られるのだろうか？

「樫羽瑞理といいます。よろしく。」

フェルマーは俺の正面に座った。その隣に希夜も座る。俺は改めてフェルマーの顔を凝視してしまう。

もし、この娘が本当に異星人だとすれば、俺は始めて異星人を見ることになる。いた、たいがいの人は初めて見るに決まっている。少なくともその点だけは間違いないだろう。そのせいかどうしても観察するような目つきになってしまっているんだろうなあ。

「やあねえ、そんな怖い顔で睨んだら怯えるじゃない。どうしたのよ、ミズリ。」

「え…、いや、なんでもない。」

俺はわざとらしく笑顔を作ると、目の前のコップの水を一口飲んだ。で、飲んでみて、実は喉が渴いていたことに気がついた。

「で、俺に相談というのは？」

「ええ、あの…、実はあたしの弟のことなんです。」

「お、と、う、と…？」

俺は意外な言葉を聞いたような気がした。弟ねえ…、確かに本人である必要はないんだが、なんとなく自分の選択肢内に兄弟というのはなかったのも未だしっくりこない。

「実は私には双子の弟がいて、二人で日本に来たのですが、日本に着いて間もなく離れ離れになってしまったのです。警察にはすぐ捜索願いを出したのですが、警察は真面目に捜してくれる気はないようで、この日本では他に頼れる相手もいなくて困っていたところ、この希夜さんと知り合ったという訳です。」

昨日の彼もそうだったけど、随分と日本語がうまい。というか、言葉だけ聞いていたら日本人じゃないなんて信じられないくらいだ。まあ、異星人としてはそれくらいはたいした問題ではないのかもしれないが…。

「で、それはなぜ俺に？俺はべつに探偵屋さんで訳でもないし、俺に相談したところでどうにかなるもので

もないと思うけど。」

俺は少し意地悪くこの台詞を言ってみる。これは本当は彼女にというよりは希夜に向かったの嫌味の方が強い。

「分かっています。でも、希夜さんがあなたなら絶対になんとかしてくれる筈だからって、とくにあたしのような人間にはと言ったので…。はっきり言って、こんな頼みを初対面のあなたにするのは筋違いというのはよく分かっています。でも、今のあたしにはこうするより他にないのです。」

反射的に希夜を睨んでしまう。希夜がどこまで俺のことを知っているのか分からないが、フェルマーの「とくにあたしのような人間には…」というあたりは当たっている。

どうも昔から俺の周辺には妙な物がよく集まってくるのだ。例えば幽霊になりたい女性とか、彼女みたいに異星人とか…。思えば、昨日そこで弟くんの方とぶつかったのだから単なる偶然ではなかったのかもしれない。希夜はそんな俺の妙な特性をよく知っているんだ。

「ミズリ、あたしからもお願い。」

希夜が両手を合わせて俺を拝むポーズを作る。

「ちなみに一つ質問するけど、その弟っていうのはお宅に似ているのかな？」

「はい、あたしの顔さえ知っていれば、弟に会った時には絶対にすぐ分かります。」

これでたぶん確定だな。昨日俺とぶつかった少年はフェルマーにそっくりの弟くんの方だったんだ。

まあ、本来ならばそんなのは警察か興信所に任せ方がいいと言ったと思う。だけど偶然とはいえ、俺は弟くんの居場所を知っているかもしれない訳。これは彼女にとっては最高の幸運だろう。しかも悪いことに、俺自身がフェルマーに興味を持ってしまった。希夜の思惑通りになってしまうのだけが気に入らないが、今は彼女を遠ざけることのほうが惜しい気がする。

「オーケー、この話し、もしお宅じゃなかったらきつと断っていたと思うよ。たとえキャンの紹介だったとしてもね。」

「じゃ、引受けてくれるんだ。」

希夜が単純に喜んだ顔をするもんだから、少しばかり胸が痛む。そんな純粋なもんじゃないんだけどな。

「まあな、ただし一つだけ条件を付けさせてもらう。」

「条件…？」

「なんでしょう？」

希夜もフェルマーもキョトンとした顔をしている。

「そうだな、お宅の本当の正体を教えてくれること。もちろん弟くんを無事に助け出した後でいいが、どうかな？」

「え、ええ…、仕方がないですね。今は弟を見つけ出すことの方が重要ですから。」

まあ、喜んで…という訳にはいかないだろうが、それは仕方がないところだろう。異星人かどうかって問題にはまだいささか疑問が残っているし、解剖したいとまでは思わないが俺も彼女のことが少しは知りたい。やり方はずるいかもしれないが、これでもかなり穏便な取引だと思う。

なんとなくタイミングを計っていたかのように麻里ちゃんがオレンジジュースを運んだ来る。自然とここで会話が途切れて、俺も大きく一息つくついでに二杯目のブレンドを頼んだ。

さあて、フェルマーに昨日のことを言うべきかやめておくべきか…。俺はジュースを飲み始めた二人の顔を交互に眺めながらちよつと悩んでいた。希夜が一口目のストローから唇を話した瞬間に俺は決心した。

やっぱり話しをしておこう。ここでお互いの信頼関係を築けなければ、どっちにしてもうまくはいかないような気がする。

「ところで昨日のことなんだが、梨亜夢から出た時にすぐそこで人にぶつかったんだ。路地から急に飛び出してきたもんだから避け損ねて転んでね。おかげで未だにお尻が少しばかり痛い。」

「やだあ、ミズリってば格好悪い。」

大きなお世話だ。そんなことは希夜に言われなくても分かっているし、莫迦にされるために話しているんじゃないっていうの。

「その人は変な団体さんに追われていたんだな。それで走って逃げている途中だったらしい。たまたま、その追っかけていた方の団体さんが面白そうだったので、つい一緒になって追っかけてしまった。」

「ミズリい、いったい何が言いたいのか？その追っかけていた団体さんが何だったっていうの？」

割と遠まわしな言い方が嫌いな希夜が、思ったとおりにイライライしてきた。ここまでの希夜の反応は予想済み。フェルマーはというと、ほとんど無反応に近く、ただ静かに俺の話しを聞いている。

「惜しいなあ、重要なのは追っかけていた方じゃなくて追っかけられていた方だよ。その俺とぶつかって、変な集団に追っかけられていたのは少年だ。しかも、フェルマーとそっくりな顔をした…と言ったら？」

「ええーっ、それって絶対にフェルムくんだよ。」

「フェルム…？」

「弟の名前です。」

「そうだろうな、まったくお宅たちって本当に似ているのな。おかげで最初にお宅を見た時、てっきり女装しているかと疑ったぐらいだ。」

「ええ、双子ですから…。」

およ…、もう少し嬉しそうな顔をするかと思えば、あまり嬉しそうでもないな。ま、いいか…。

「で、ひょっとすると、もう連中に捕まっているかもしれないんだが、なんだったら今からでも救い出しに行ってみるかい？」

「場所は分かってんの？」

「まあね…。」

俺は希夜とフェルマーの顔を交互に見比べてみた。希夜は興奮しているのか俺のことを睨んでいるし、フェルマーの方は何かを深く考え込んでしまっている。この二人の対比はなかなか興味深いものがある。

「よし、じゃあ決まりだ。ちょっと電話をしてくる。」

そう言って立ち上がるとカウンターの端にあるピンク電話に10円玉を1枚放り込む。電話の先は俺の研究所だ。

「あ、基か？俺だけど…。うん、量さんがいたらちょっと代わってくれ。」

電話の向こうで基が量さんと呼んでいる声が聞こえる。俺はその間にさらに3枚の10円玉を追加した。

「あ、量さん？昨日話した件ですけど、やっぱり行ってこようかと思って。で、KTB研究所の方への連絡、よろしく願います。はい…、それじゃ…。」

うちに古くからいてくれる量さんが、柏木の私設研究所の中に知り合いがいるっていうんで、昨夜のうちに手は打っておいたんだ。これならいきなり行って怪しまれることもないだろうし、何も危険を冒して押し入ることもないだろう。まずは情報を集めること、問題はその後だろうけど、果たしてこの二人を連れてどこまで出来ることか…。

ま、なんとかなるだろう…。

「瑞理ちゃん、あんまりやばいことにゃ手を出すなよ。」

「ん、心しとくよ。じゃ、これ3人分…。」

ズボンのポケットから1000円札を2枚出すと麻里ちゃんの方へ差し出す。

「あら…、マスター、榎羽さんのおかわりの分は？」

「ああ、いいよ、どうせまだ入れてない。」

「だそーです。じゃ、1350円になります。ありがとうございます。」

まただよ…、そういえば2杯目を頼んでいたのを忘れてた…。これで当分の間、俺は金を払うたびに笑われることになるんだ。麻里ちゃんのいつものクスクス笑いを背中に聞きながら、俺は2人に行くよと声をかけた。

2人はずっと俺を見てたらしく、声をかける必要もないくらいすぐ立ち上がった。2杯目のオーダーをチャラにしてくれたマスターにちょっと挨拶をして梨亜夢を出る。

「へえ、ミズリが奢ってくれるなんて初めてじゃない。」

梨亜夢を出た途端、後からスルツと俺の左腕を取ると、希夜は思いっきり意地悪い顔してそう言いやがる。当たり前だ、キャンー人に誰が奢るもんか…と言いかけて、それは止めておいた。人生この先何があるか分からない、ここでまた突っ込まれるネタを振ることもないだろう。俺は黙って希夜の腕を振りほどく。

「ちえっ、つれないんだからあ。」

希夜には悪いと思うが、その気もないのにそれらしいポーズを取るなんてのは苦手だ。ま、仕方がない。

柏木が私的な研究をする目的で建てたと言われるKTB研究所は、ここから約2キロ離れた隣町にある。べつに俺一人なら歩いていけないということもない距離なんだが、一応はレディが2人もいるということでバスで行くことにした。実を言えば俺自身はバスという乗り物があまり好きではないのだけど、こうなったら好き嫌いを希夜に見せるのも癪なので黙っている。どうせ3つ先の停留所だ。

バスはほとんど待つこともなくすぐに来た。珍しく道もすいている様で停留所3つ分はあっという間だった。バス停を降りるとそこからまた歩きになるのだが、KTB研究所はうちなんかと違って派手な看板をドーンと立てているので、バスから降りてすぐにその位置が見えている。

「あそこにド派手な看板が見えるだろう。もしかするとだけど、あそこに弟くんがいるかもしれないんだ。」

フェルマーはちょっと首をかしげて、耳を澄ますような仕草を見せる。しかし、俺はジッと見ているのに気がつくとすぐに止めて黙って歩き出した。

まあ、異星人かもしれない人のやることだから、べつに不思議でもなんでもない訳だが、やっぱり俺にも好奇心というものがある。今は弟くんを助け出すことが先決だけど、今の行動が何を意味しているのか後で確認してみよう。

「ねえ、何の研究をしているとこなの？」

バスを降りてから、弟くんを見つけられるかもしれないという緊張からか、なんとなく重苦しい雰囲気は漂っていたが、とうとう耐え切れなくなったのか、希夜が俺の隣に並ぶとそう訊いてきた。

「風邪薬とかビタミン剤の新薬の研究だな。その辺のドラッグストアで売っている薬の約20%は、たぶんここで生まれた物だと思うよ。」

「ふーん、じゃ、有名なんだね。」

希夜が感心したように頷く。でも、一つ勘違いをしているぞ。有名なのはその薬を売っているメーカーの方であって、研究開発をしている会社はその存在すら知られていないのが普通だ。べつに有名でもなんでもないんだけど。

…と、その時！

「きゃあ！」

フェルマーの叫び声。

振り返ろうとした俺は、振り返る間もなくいきなり後頭部に強い痛みを感じて地面に突っ伏してしまった。何が起きたのかさっぱり分からない。

「ミズリ！」

希夜のヒステリックな声が、俺の身体を包み込む。

「さあ、今のうちに早く逃げるんだ！」

…ん？聞いたことのない男性の声。

ボーッとしている頭を無理やりたたき起こし、首だけでも声の方へと向ける。

「きゃあ！」

これはフェルマーの2度目の叫び声。

真っ赤なトレーナーにGパン、高くないもない身長、太りすぎでも痩せすぎでもない体型、見たこともない少年がフェルマーの腕を掴んで引っ張っていかようとしている。フェルマーはそれを振りほどこうとしてもがいていた。

いったい何者なんだろう？少なくとも先日の団体の中にはこんな少年はいなかった筈だ。

「あんた、何をすんのよ。その手を離しなさいってば。」

希夜が勇敢にもその少年に立ち向かっていったが、太刀打ちできる訳もなく簡単に振り飛ばされてしまった。

「キャン！」

「瑞理さん、助けてえ！」

フェルマーが甲高い声をあげて、希夜に気を取られた瞬間を狙ったように少年の手を振りほどいた。俺はようやく身体感覚を取り戻して、全身を奮い立たせるとフェルマーをかばうように少年との間に立ち向かった。

さあ、一発殴ってやろうかと思った瞬間にとても奇妙な空気が流れて、俺たちは全員その場で動きを止めてしまった。俺なんか頭の上に振り上げた右手をどうしたものか、余計に身動きがとれなくなってそのままのポーズで少年を睨みつけるしかできなくなっている。

「おまえ…誰だ？」

自分の手から逃げ出したフェルマーを信じられないという目で凝視して、少年はかろうじてこの台詞を喉から絞り出した。

「やだ…。」

言われたフェルマーはいきなり座り込んで泣き出してしまふ。

で、俺はというと今の一言ですべての謎を解いていた。つまりはこういうことだ。彼もフェルマーを弟くんと間違えたんだ。たぶん、弟くんの方の知り合いかなんかだろうが、きっとお姉さんがいることまでは知らなかったんだろうな。俺自身も一度間違えているだけに彼の今の気持ちはよく分かるような気がする。殴られたことへの怒りはあれど、どうも彼を責める気にはなれないよな。

とりあえずこの場をなんとかしなくちゃいけない。人がすっかり集まってきてしまった。ここで柏木の手の者にフェルマーを見られたら、それこそ厄介なことになってしまうだろう。

「話しは後だ。早くここから立ち去らないと面倒なことになる。希夜、フェルマーを立たせろ。ほら君も一緒

に来るんだ。」

誰かが通報してくれたのか警官がこっちへ走ってくるのが見える。こんな所で警官に喧嘩の理由なんて訊かれるなんてのは、ちょっとばかりパスをしたい。彼にも俺の言わんとすることが分かったようで、大きく頷くと一緒に走り出した。希夜とフェルマーも走り出している。

「ミズリい、早くう。」

希夜が大きく手を振っている。どうしてこういう場面で人の名前を叫ぶかな。とにかく行かなくちゃ。俺の前を走っている3人を見ながら、なんとなく変な仲間が増えたような気がしてきた。なんだがとても妙な取り合わせだが、こんなのもたまには面白いかもしれない。

俺はこれから起こるだろう冒険に期待している自分に気がついて、自然に口元が緩むのを感じていた。

SET II 「冒険は偶然の中で」

S62. 24. NOV <<H17. 22. OCT>>

SET Ⅲ 「決裂」

なんとか警官をまいた俺たちは、ここ梨亜夢に戻ってきていた。ちなみに俺たちはというのは、希夜、フェルマー、俺、それに俺を殴った少年の四人のことだ。

「本当にすまない。すっかりフェルムだと思ったもんだから。」

梨亜夢の椅子に落ち着いた途端、もっとも俺だけはまだゼゼ息が荒いが、少年が本当にすまそうな顔つきで謝罪した。

「気にしないでいいさ、俺だって最初は間違えた一人だ。ところで、俺の名前は榎羽瑞理、こっちが坂上希夜、そして…。」

「フェルムの姉でフェルマーといいます。」

フェルマーに俺の台詞を持っていかれてしまった。

「俺は結城和也ってんだ。フェルムと同居している。だけど…本当にそっくりだな。」

和也は感心したようにまじまじとフェルマーの顔を見つめている。和也の話す中に所々妙なアクセントが入っているのが気にかかる。どこの出身なんだろう。

「ねえねえ、じゃあさ、和也くんもフェルムくんを捜していたんだ。」

「うん、フェルムが変な連中に連れ去られた後、どうにも心配で、あいつ一般常識が欠けていると言うか、どこか抜けていると言うか…。あ、いや…、その…。」

和也はフェルマーの視線に気がついて、語尾が段々小さくなったかと思うと最後にはペコリと頭だけ下げる。

「気にせず、どうぞ続けて。」

あらら、フェルマーはまったく意に介さないという感じでニコリ笑う。これじゃ、和也の言ったことをそのまま認めたようなもんだ。ま、たぶん当たっているんだろうな。

「で、とにかくフェルムを連れ去った連中を捜そうと思ってこの町まで来たんだ。あいつらKTBのロゴが入ったバッジを付けてたからよ。あれは間違いなくあそこの製薬会社のロゴのはずだし。そしたら、あの研究所の前にあんたたちがいるのを見かけて、てっきりあの連中の仲間かと思って…。」

どうも喋るのが苦手なだけらしいな。たったこれだけのことを喋るのに大汗をかいている。

それにしても妙なのは、こいつがどう見ても真面目な学生には見えないってことなんだ。俺の知ってるフェルムとは、どちらかというまるで正反対の性格をしている。もっとはっきりと言えば、どこをどう知り合っただけで同居しているのか少しばかり興味がある。

…と、ここまで考えて、なんとなく和也はフェルムが異星人だということを知っているんじゃないかと思えてくる。そう考えた方がこの妙な違和感は消えてくれるんだが。

「榎羽さん、どうしようか？俺のせいであの研究所に行きそびれちゃったんだろ？」

そういや、そうだったっけ。だけど今さらあそこに行っても仕方がなさそうだし、少なくともこんな大所帯でいったいどうすんだよという感じ。元々二人を連れて行くというだけでもどうかと思っていたのに三人も連れて歩くなんで御免被る。

「そうよ、ミズリ、早く助けに行かなきゃ。」

ええい、このおてんこ娘め！希夜の奴、この状況を理解してんのか、いやしてないだろうな。少しは高校生なんだから自分の頭で考えろっていうんだ。まったく信じられん性格だ。

とりあえずこういう何も考えていない奴は放っておくとして、どうにかしなきゃいけないという事実は変わら

ないんだよな。さあて、どうしたものか……。

俺はなんとなくフェルマーの顔を見た。べつに何かを期待してと言う訳ではなかったんだが、もしフェルマーが本当に異星人なら、この場をなんとかする術が一つくらいあるんじゃないかと思ったのだ。そして、俺が期待した通りにその答えはすぐ返ってきた。

「あの、皆さん、待ってください。」

ん……？

フェルマーが希夜を制するようにしてゆっくりと立ち上がった。

希夜ときたら、自分が何故押しとどめられたか理解できずに露骨に不満の色を顔に出している。それでも俺が睨んでいるのに気が付くと、渋々といった感じで浮かしかけた腰を椅子に降ろす。

俺はさあ何かが始まるぞと内心ワクワクしながら、そしてそれを周りに悟られないように注意する。

「たぶんあの建物の中に弟はいません。理由を訊かれると少し困るんですけど、とにかくあの建物の周辺にはいない筈です。」

とっさにテレパシーという単語が頭の中に浮かんでくる。あの時のフェルマーが耳を澄ますような仕草は、そう考えた方が納得しやすい。しかし、もしSF小説に出てくるようなテレパシー能力があるなら、ちょっと鈍いと言う気がしないでもないよな。まあ、その辺は色々と事情ってものがあるんだろうということにしておく。

「よおし、じゃ、最初からやり直そう。お宅がそう言うなら、俺にもう一つ心当たりがあるからそっちを先に当たってみよう。それに連れ去った奴は分かってんだから、いざとなれば本人に直接訊くという手もあるしね。」

「なんでよ、あたし納得できない。」

希夜はプクッと頬を膨らませて精一杯の反論をする。

「いいんだ、彼女の言葉を信じるんだ。和也くんもいいな？」

「ええ、まあ、いいです。」

俺は大きく頷くとまだ不満を顔に出したままの希夜を無視することにした。どうせこいつの性格からすりゃ、今は何を言っても納得しないに決まっている。

「あたし、帰る！あんたがそんな人だったとは見損なったわ。」

希夜は派手な音を立てて立ち上がると、フェルマーに捨て台詞を残して梨亜夢を飛び出していった。いつの間に出していったのか、テーブルの上にはジュースの代金がきちんと乗っている。さすが……。

「いいんですか？彼女……。」

「構わないさ、明日になればまた何もなかったような顔で戻ってくるんだから。それに、どうせ希夜には聞かせたくない話もあるしね。」

「彼女に聞かせたくない話し……ですか？」

「まあね。」

和也なら聞かれても差し支えないと思うし、この後のためにも和也がどこまで知っているのかははっきりさせておく必要があるだろう。それにこれ以上は憶測だけで行動するのは俺の好奇心が耐え切れん。

「さあて、最初の約束とはちょっとばかり違うことになるけど、先に聞いておかないと弟くんの捜し方が大きく変わるようだからね。」

「あたしの正体について……ですか？」

フェルマーはやや俯き加減に上目使いで下の方から俺を見る。その瞳は既に俺のすべてを見透かしているようですごく怖い。たとえ自分の母親に叱られていても、こんな気持ちにはならないだろう。

気が付くと握り締めている左手が汗でヌルヌルしている。そんなに強く握っているつもりはないんだが…。

「もし言いにくいということなら、俺の方から言ってもいいが…。」

「いえ、そこまでおっしゃるといことは、ほとんど知っているんでしょ？ここで隠したって、いずれは話す約束でしたし、弟を捜すのに必要だというなら仕方ありません。」

ふと気になってカウンターの方に視線だけ走らせると、マスターはいつものように新聞を読んでいる、こっちは話は聞いていないようだ。麻里ちゃんは買い物にでも行っているのか、ちょっと姿が見えない。

まあ、マスターだけならもし聞かれても問題はないだろうし、ある意味麻里ちゃんがいけないのは好都合だった。

改めてフェルマーに向き直ると…、だらしないもので、自分から切り出しといて、いざ話しをしようとした途端に言葉が出てこない。今さらやっぱいいいです…なんて言えないし、ええい、しっかりしろ。

「俺が知っているのは、お宅ら姉弟が地球人じゃないってことだけだ。正直言って、それを先に知っていたからお宅に協力する気になったんだ。気を悪くしたら謝るが…。」

「いえ、慣れていきますから。」

そういう言葉のイントネーションに加え、フェルマーの瞳の色が何よりも真実を表していた。やばいなあ、やっぱり怒らせただろうか。これは真面目に自分の職業は明かさなない方が身のためだな。

「あたし達の故郷はイオルスと言います。太古からの習慣に従って、あたし達は地球にやってきました。」

その口調は完全にさっきまでのものとは違い事務的だった。なんだかフェルマーとの間に深い溝を作ってしまったな。完全に嫌われてしまったようだ。

「一応言っておくけど、俺はお宅らをどうこうしようという気はないからな。下心がなかったと言えば嘘になるが。」

「いえ、もう結構です。地球人なんてみんな同じです。あなたも例外じゃなかったというだけの話しですから。残念ですがここからは別行動します。どうもありがとうございました。」

「それじゃ、フェルムを捜すのに俺の助けはいらないとでも言う気か？せっかく心当たりがあるというのに。」

「仕方ありませんね。あたしは一人ででも捜します。自分の正体を知っている人の方が危険だということをよく知っていますから。」

フェルマーは立ち上がった。もうその瞳には友好的な色はまったくくない。

「さようなら、ここまでのことは感謝しているわ。」

「それはどうも、弟くんが見つかることを祈っているよ。」

なんか売り言葉に買い言葉の典型的な例だな、こりゃ…。

「君もフェルムを捜す気なら、彼女についていった方がいい。どうやら俺はお役御免らしいから。」

自分の言葉を正当化するためには、ここで腕づくで彼女を押しとどめることもできず、既に梨亜夢を出て行ったフェルマーの後姿を指差した。もうこれ以上の厄介ごとはこれで終わりにしたい。これで和也が出て行ってくれればジ・エンドだ。俺は二度と異星人になんて会うこともないだろう。

「樫羽さん、本当にそれでいいんですか？俺にはよく分からないけど、もし少しでも気にしてんなら、フェルムを助けてやってくれよ。あの人だって分かってくれるよ。」

「いいんだよ、どうせ俺には元々関係ない世界だったんだ。」

もう、わざわざ俺の方からやろうって気にはなれない。どうせ、よくある厄介ごとの一つだったんだ。

「じゃ、せめてフェルムが掴まっている場所を教えてください。俺だけでも行きます。」

「三浦海岸だよ。そこに柏木高文という男の別荘がある。フェルムはたぶんそこにいる。」

「じゃ、行ってみます。」

「ああ…。」

和也は不器用に頭を下げると、梨亜夢を出て行く。表面はおとなしく振舞ってはいたが、あの様子じゃ相当怒っているな。いきなりドアを強く閉められて、マスターもさすがに顔を上げた。

「おいおい、この店の半分はまだ借金なんだがな。」

「すみませんね。」

俺はカウンターの方へと移った。他には誰も客がいないということあるし、なんとなく急にマスターと話しがしたくなったから。あんまり頭を使いすぎて疲れたというのもあるが、和也じゃないけど俺自身がイライラしているんだ。マスターとどうでもいい会話を楽しみたかった。

「さっきの話し、俺に聞かせちゃってよかったのかい？」

「えっ？」

「あの女の子のことさ。本当に地球人じゃないんなら、俺も一枚加えてほしいね。」

「冗談でしょ、あんなの本気にするんですか？」

ちょっとばかり油断してたかな。面食らったけど俺を強請るつもりでもあるまいに。それでもいささか警戒してしまう。

「本気にするかどうかは別として、口止めとかしなくていいのかい？」

「こんな絵空事を喋っても誰も本気にしませんよ。」

「でも、その筋に話せば結構面白いと思うが。なんせあの連中はかなり暇だからね。」

あの連中って毎週水曜日にここに集まるマスターの旧友たち…。そういえば、マスターもその暇人の一人なんだっけ。

「で、俺にどうしろって？」

べつにマスターがあんな連中に喋ったところで不都合が生じる訳でもないが、マスターまで敵に回して二度とここに来られなくなるのは惜しい気がする。

「いやね、あのままじゃ可哀想だなんて思ってさ。」

マスターはポンッと俺の肩を叩くと、ニヤニヤしながらカップを片付け始める。マスターがこんな言い方をする時は一つしかない。それは経験上よく知っているが、だからと言ってその手に乗るのも悔しい気がする。しかし、それ以上に重要なのは、俺がマスターのことを知っている以上に、マスターはたぶん俺の性格を見抜いているだろうという点だった。

「マスターならどうする？」

「最後まで見届けるさ。彼女を引っ叩いてでも、一緒に弟くんを捜しに行くね。それが彼女にとって必要なら。」

そりゃそうだろうさ。俺もその考え方に反対する気は無い。ただ、彼女のその必要という中に俺という要素が入っているのか、そこにいささかの疑問がある訳だ。

「手遅れにならなきゃいいんだけどね。」

えっ…。

反射的にビクッと反応してしまう。思わずマスターの顔を凝視してしまうじゃないか。まったく読めない人だ…。

しかし、どうしよう。なんか急に不安になってきてしまったよ。柏木のことだ、まじに弟くんを解剖するかもしれない。和也の奴が間に合えばいいが…。柏木の別荘も分かりやすい所があればいいんだが、危険な研究に備えているのか民家の無い海岸沿いにある。知っている人には分かりやすい場所も、知らない人間が捜すとなるとどうなるか分からない。

ああ、駄目だ。元々俺は他人に事を任せて後ろで見ているだけというのができない性格なんだ。だからこそ、自分から首を突っ込まないようにしているというのに。

「ミズリちゃん、どうした？」

「あ、いや…。そうだ、マスター、電話を借りるよ。」

カウンターの端にあるピンク電話に十円玉を3枚ほど投げ入れる。記憶しているというより指が勝手に覚えている番号をダイヤルしていた。

二度コールして、いつものように基が電話に出る。

「あ、基か？俺だけど。悪いんだけどさ、お宅のマーチ、今日これから貸してくれないかな。あ、うん、そう…。じゃ、いつもの所にいるから…。」

そこでちょっと考えてから…。

「あ、それから…。」

…で、言い終わる前に切られてしまった。後にはただ信号音が響いているだけ。ちょっと迷ったのがいけないと反省しつつ、どうせたいしたことじゃないからと開き直る。

ま、これで取り敢えずは三浦海岸までの足は確保できた訳だ。

「マスター、サンキュー。」

「やっぱり行くのかい？」

「まあね。」

やっぱり…って、マスターがけしかけたくせに。

「俺も若い頃は色んなものに首を突っ込んだつもりだったけど、この歳になって思い出すのはあの時これをやっておけばなあって後悔だけだ。」

「だから、俺にはそういう後悔をするなって？」

「そこまで優しくはないさ。決めるのはミズリちゃんだし、まあ先輩の愚痴とでも思っておいてくれればいいさ。だけど、もし本当に後悔したくないって気があるんなら、今できることはできるだけ今やっておいた方がいいんじゃないかな。」

一言も反論の余地がない。たぶんマスターの言っていることは当たっているよ。このままフェルマーと別れたら、おそらく俺はこの先ず一つと後悔することになるだろうな。

梨亜夢の外に基の白いマーチが停まったのを確認して、俺は伝票を掴んで立ち上がった。

「珍しく年上らしいことを言っちゃったけど、実際この年齢になって初めて分かることもあるんだ。」

「じゃ、先輩の忠告には素直に聞くとして、悪いけどこれツケといてよ。後で払いに来るから。」

「ああ、構わんよ。」

マスターはニカッと笑って伝票を受取ると、親指で店の前のマーチを指差した。

「マスター、サンキュー。」

俺は右手だけでマスターを拝むと梨亜夢を出た。基がくわえタバコのままマーチから降りてくる。

「よお、ご苦労さん。悪かったな。」

「なあに、どうせこの時期は暇だから。もっとも啓さんは実験室に籠りっぱなしのようだったけどね。」

「そうか……。」

なんとなく梨亜夢の方に振り返ると、マスターがカウンターの中から手を振っている。思わず手を振り返した後で、それが俺に向けて振られたもんじゃないことに気がついた。

「あら、樫羽さん、今日はもうお帰りですか？なんか最近行ったり来たり忙しいですね。」

「まあね、いろいろとあってね。」

ちょうど買い物から戻ってきた麻里ちゃんが、いつの間にか俺たちの後ろに立っている。マリンプルーのセーターの上にドナルドダックのエプロンを付け、コンビニエンスストアの袋を提げているといった出で立ちだ。他人も羨むような程の真っ直ぐに肩まで伸ばした髪の毛に、まあまあのプロポーション、性格には何の問題もない。なんでこんな条件のいい子に恋人の一人もいないのか不思議なくらいだといつも思っている。まあ、あえて難を言わせてもらえるなら、俺の顔を見るとクスクス笑い出す癖を何とかして欲しいということと、俺の好みではないということだ。

「あら、そういえば、そっちの方は初めて？」

麻里ちゃんは例のクスクス笑いを堪えながら、俺の脇にいた基に気がつくやと軽く会釈した。

「あ、小笠原基といいます。よろしく……。」

あらら、基の奴、柄にもなく真っ赤になってやんの。ま、普段が研究所に籠りっぱなしの生活だから少しはいい傾向かな。学生時代から浮いた話しの一つもないから、ひょっとしたら女嫌いなのかと思って心配もしていたんだが……。たしか俺の記憶に間違いがなきゃ二人とも同じ年の筈だし、今度暇な時にでもこの二人をくっつけてみるか。

「じゃ、また来るよ。」

「はい、またお待ちしております。」

再び軽く会釈して店内に入っていく麻里ちゃんの後姿を基がボーッと眺めている。あーあ、まったく見ていらんないね。基がこんなにだらしが無いとは思わなかったわ。

「おい……。」

「ん……？」

「基はああいうのが好みなのか？」

「名前は？」

「麻里、上は知らないな。今度訊いておいてやるよ。」

「うん……。」

ふと時計を見ると、もう針は6時を指している。こりゃ、三浦海岸に着く頃にや完全に真っ暗だな。

「じゃあな、今夜は帰らないかもしれないが……。」

「あ、俺も行くよ。どうせ今日は戻ってもやることないし、啓さんがそうしていいって。」

「そうか……、じゃあ運転の方は任すわ。」

「はいな。」

基は再び運転席に座るとイグニッションキーを回す。お世辞にも静かとは言えないエンジン音が周囲に響き渡る。

「三浦海岸に行ってくれ。そこに柏木の別荘があるんだ。基も一度行っていると思ったが。」

「ん、一昨年のパーティで行ったところだね。」

そうそう、あれは柏木がうちを出し抜いて発表したビタミン剤が売れて、製薬会社が金を出してパーティを催した物だった。一応、うちもその製薬会社とはつながりがあったんで出席はしたが、結局は柏木のパ

フォーマンスのために開いたようなパーティなだけにあまりいい気持ちはしなかった。

そういやあ、あのパーティ以来なのか。親父さんはどういう訳か柏木とは仲が良かったこともあって、小さい頃はよく連れられてあの別荘に行ったもんだっただけ、変わりや変わるものだよな。まさか、こんな形で柏木の別荘に向かうことになるだなんて親父さんも考えつかなかっただろうな。

それにしても、今回の俺って本当に偶然って要素だけで行動してるんだよな。偶然梨亜夢の前でフェルムとぶつかって、偶然希夜が俺とフェルマーを引き合わせ、偶然俺はフェルムを誘拐した奴を知っていた訳だ。そして、偶然にも俺はこの話に乗る気になってしまった。

考えてみりゃ、一回はフェルム捜しを止めた筈なのに、そこには偶然にもマスターがいて、偶然にも俺をその気にさせてしまった。まったく、みんなして俺にどうしてもフェルム捜しをやらせようと結託しているんじゃないかと疑いたくなるよ。

でも、まあ、せつかくここまで乗りかかった以上、気は進まなかったが最後まで通すしかないようだ。ここで止めたら、それこそ俺の主義に反することになる。

ふとフロントガラスに希夜の顔が浮かび上がったような気がした。でも、それは対向車のヘッドライトがガラスに反射しただけと気がついて思わず苦笑いする。今頃、みんなはどうしているんだろう？

マーチは一路三浦海岸を目指して夜のイルミネーションラインを駆け抜ける。

SET Ⅲ 「決裂」

S62. 13. DEC <<H17. 17. DEC>>

SET IV 「マーチはコンチェルトに乗って」

いい加減、市街を抜けてしまうと明かりが少なくなってくる。海岸通りに入るとその雰囲気は尚一層強くなり、マーチのヘッドライトに照らされて浮かび上がる風景だけが、俺たちのすべてと言っても過言じゃなかった。俺たちは梨亜夢を出てからほとんど口を開いていなかった。俺が考え事をしていたということもあるが、基も行き先を聞いただけでそれ以上何も言わなかったせいもある。もともと口数の少ない奴だから、俺から話しかけない限りこうなるのはいつもの事と言えばそれまでなんだが。

おかげでなんとなく重苦しい雰囲気が車内に立ち込めていた。ただ、カーステレオだけが何かを勘違いしたかのように妙な音楽を流している。

「基、その曲、どうにかなんないか？」

「何が？」

「他にテープ無いのか？」

「あるけど、瑞理はこういうの嫌いだっけ？」

「いや、そういう訳じゃなくて…。」

ま、いいけどね。俺もこういうのが嫌いな訳じゃないし、べつに悪いとも思わないが、何が嬉しくて真夜中の三浦海岸でアニメの主題歌を聞かなきゃなんないんだ。しかも、いい歳した野郎が二人だぞお。

「で、このまま柏木の別荘まで行っちゃっていいのかい？」

「そう、それをずーっと考えていたんだが、やっぱり隠密行動をとった方がいいと思うんだ。車はどこかその辺に停めておいても大丈夫だろ。」

「了解。」

適当な場所を見つけて車を止めると俺たちは外へ出た。闇の中の白いマーチは、ヘッドライトが消えてしまうと驚くほど不気味な雰囲気をかもし出していた。それが余計に重苦しい気分を拍車をかけてしまう。

「あとはどうせ真っ直ぐなんだから、浜を歩いて行けばいいだろう？」

「まあ、運が良ければね。いや、悪ければと言うべきかな。」

「何だよ、そりゃ。」

「基にもすぐ分かるさ。さあ、行こう。」

俺は基を促して歩き慣れない砂浜を歩き始めた。今日は生憎と月も出ていない。俺は懐中電灯を持ってこなかったことを悔やんだ。しかし、すぐに思いなおして、これはかえって好都合なんだと思うことにした。いや、そうとでも思わなきゃ、とてもじゃないがやっつけられない。

しかし、どうしたものか…。あの三人の動きがまるで分からないというのに、莫迦正直に正面から訪ねていくのはいくらなんでも間が抜けている。かといって、こっそり忍び込めるほどの技量が自分に無いのもよく分かっている。

せめてフェルマーがここにいてくれたら…。

「おい、瑞理、あれ何だと思う？」

先に歩いていた基が前方を指差す。俺は目を凝らして基の指差す方を眺めてみた。

真っ暗な空間にぼんやりと光る物体がユラユラ揺れながらこっちへ近づいてくる。一見して火の玉に見えないこともない。

「何だ、ありやあ…。」

「さあ…？」

暫くそれを見ていたら、やがて一つが四つに増える。後から増えた三つの方は最初の一つと違って明るくはっきりとした光だ。よく分からないが、それがフェルムによる光のような気がして俺は少し興奮していた。

「基、フェルムが来たら保護するぞ。」

「フェルム？」

「あの光の正体さ。」

何の確証もない。だが、俺はこれまでの偶然と自分の運の良さに賭けた。基はフェルマーの話を知らないで何のことも分からずキョトンとしていたが、いつものことだから気にしないようだった。

俺たちは砂浜に寝そべてユラユラ揺れる光を待つことにした。その光は初めはゆっくりで段々と揺れが速くなって来る。そして、それに合わせ大きさも急に大きくなって来るような気がした。後から増えた三つの光もほぼ同じ速度で大きくなって来る。

「来たぞ。もし暴れたら殴ってでも連れて帰るから。」

「はいよ。」

光が俺の前を横切る。しかし、それはもう光ではなく人の形を浮かび上がらせていた。どうやら俺たちには気がついていないようだ。最も近づいたその瞬間だけ、フェルムの顔が蠟燭の炎に薄暗く照らされるのを確認できた。そうか、あの妙な揺れ方は蠟燭の炎だったのか。だとすりゃ、後ろの連中が持っているのは懐中電灯か…。

「フェルム、蠟燭の火を消せ！」

「誰だ？」

「俺は樫羽という者だ。フェルマーから君を捜すように頼まれたんだ。」

一度通り過ぎていたフェルムは持っていた蠟燭をかざして、俺を捜すように振り返った。

「フェルマーから…？」

「詳しい説明は後だ。奴らに居場所が分かってしまう。早く火を消すんだ。」

「あ、うん…。」

ようやく追っ手に気がついたのか、慌てて蠟燭の火を吹き消した。

「畜生、つけられていたのか。」

「こっちへ、早く。」

連中の方も目印である蠟燭の火が消えたことで急に動きが早くなった。いつまでもこんな歩きにくい砂浜にいる理由もないし、こんな時はサッサと逃げるに限る。とにかく状況が分かっていないフェルムを急かしてマーチまで走る。結果的に砂浜の方に来たのはラッキーだった訳だから、できたらこのまますんなりと最後までいきたい気分。

しかし…。

「フェルマー！」

マーチまであと少し…って所で、フェルムが突然立ち止まった。

「どうした？」

「フェルマーが捕まった。他にも二人いるらしい。畜生、あいつら…。」

フェルマーが捕まった…、考えていなかった。どうやら和也と希夜が一緒らしいな。まさか、あの三人が本当にここまで来るとは思っていなかった。

本来ならここでフェルムを連れて帰って終わりだった筈だ。明日にでも梨亜夢でフェルマーに引き合わせ

てお役御免というつもりだったけど、フェルマーが捕まってしまったとなれば話しは別だ。そう簡単に物語は終わってくれそうにないらしい。

「瑞理、どうすんだ？」

「正面から行くしかないだろう。女の子たちに怪我させる訳にもいかないからな。」

「待って、僕にいい考えがある。」

「どうするんだ？」

「僕とフェルマーで次元扉を開くから、みんなを助けてここに戻るんだ。」

「そんなことが出来るのか？」

「任せて、大丈夫だから。」

ここはフェルムを信用するしかあるまい。フェルムは自信たっぷりに軽く胸を叩くと、地面に人が一人入るくらいの円を描いた。そして、聞き取れなかったが何やら呪文のようなものをブツブツと呟いた。砂に描いた円は、フェルムの言葉に反応して次第に銀色に輝き出す。

「今だ！」

フェルムの合図に、俺と基は反射的にその円の中に飛び込んだ。何が起きたのか自分でも分からないが、次の瞬間目の前がパッと明るくなって、その眩しさに一瞬目をつぶる。そして、次に目を開けた時には目の前にはフェルマーたちがいた。周囲には柏木の手の者が数人いる。

「ミズリィ！ やっぱり助けに来てくれたんだあ…。」

三人は両手を縛られている。希夜などは殴られたのか右目の下が少し腫れている。それを見て、どうやら俺の理性も完全に吹っ飛んでしまったらしい。

「お、おまえは…。」

連中の中央にいた奴。割と大柄で額がやや後退しかかっている男が、俺の顔を見て明らかに狼狽している。何度か会ったことがある奴だ。たぶん向こうも俺を知っている筈。

「おまえは樫羽んとこの坊主。」

「生憎と今は所長だよ。そこの三人は俺の友人なんだ。返してもらえると嬉しいんだがね。」

「先生の研究の邪魔をしないでくれ。」

「邪魔？ いつも人のとこの邪魔をしてんのはそっちじゃないのかい。この前の風邪薬は結構売れたそうじゃないか。」

「なんだと！ 人間きの悪い言い方しやがって。言いがかりは止めてもらおう。」

「俺が表沙汰にしないのはべつに証拠がないからじゃないんだけどな。恩をきせるつもりはないが、俺の友人にまで手を出すと言うなら話しは変わると思え。今回くらいは手を引いてくれても罰は当たらないと思うが。」

こうなったら後にも引けないし強気に攻めるしかないだろう。証拠があるなんてのはほとんど口から出任せ。本当は証拠がないから訴えられないんだ。しかし、今はフェルムの次元扉のおかげで何もない空間から人間が現れたというだけでもインパクトがあるのに、その現れた人物が商売敵だったということもあって、完全に奴さんはパニックになっている筈だ。

「取引しよう。そこの三人とフェルムは諦めろ。その代わりに今までのことはすべて水に流すし、今回のことも他言しないよ。」

「しかし、先生が…。」

「柏木さんの研究は、今の段階じゃまだ早すぎるよ。それにある意味危険だ。それくらいのことはあんたに

だって分かっている筈だ。」

三人を縛っていたロープが解かれた。三人のホツとした表情とは対照的に男は情けない顔になる。

「早く…、先生が帰らないうちに…」

俺はまだ開きっぱなしになっていた次元扉に、希夜、フェルマー、和也、フェルムをそれぞれ飛び込ませた。俺と基だけが最後にそのまま残る。

「柏木さんに伝えてくれ。あんたは生まれた時代を間違えたんだってね。」

基を先に飛び込ませる。俺はそこにいる連中の顔をグルッと見回して、少しずつ閉じかけていた次元扉にギリギリ飛び込む。瞬間、急に周囲が暗くなって、ここはさっきの砂浜。みんなも揃っている。

「さあて、帰ろうか。」

「瑞理さん…。」

「よかったな、もうこれで心配しないで眠れるってもんだ。」

「あたし…。」

しきりと謝りたがっているフェルマーをわざと無視して、俺は助手席に乗り込んだ。事情をよく分かっていないフェルムだけが素直にフェルマーとの再会を喜んでいた。

「みんな乗ったな。ちょっと狭いが仕方ない。基、出していいぞ。」

さほど広くもないマーチの後部座席に四人もの人間を押し込めたもんだから、身動きがまるで出来ない状態で、ほどなく疲れと安心感からか四人とも眠ってしまった。俺と基だけが潮風の香りとともにこの深夜のドライブを楽しんでいた。さすがに基もあのテープは聞く雰囲気じゃなかったのか、俺がカーステから抜いても何も言わなかった。

「瑞理、この後はどうすんだ？」

割と状況を飲み込んでいない基のそんなのんびりとした口調を聞いて、やっと俺もホツとした気分になってきた。

「帰るだけさ。彼氏を保護したからね。」

「は…？」

「彼氏…フェルムを柏木のおっさんから取り戻しに来たんだけど、まさか今まで分かっていなかったとか…？」

基は黙って肩をすくめてみせる。どうやら本当に分かっていなかったようだが、どうせ基は俺の奇行には慣れている。今回もそんな俺の気まぐれのひとつでも思っているんだろう。ま、いいけどね。

「でも、それで分かったよ。後ろのあれ、柏木さんだよ。さっきからうるさくってしょうがないんだから。」

言われて後ろに振り返ると、車が一台追ってきていて、しきりにパッシングを繰り返している。よくは見えないが、たぶん柏木だ。あのおっさん信じられないようなスピードでマーチの後ろにぴったりくっついている。

「へえ、あのおじさん、年齢の割にはよく頑張るじゃん。130も出ているよ。」

「まあ、この辺が限界だろうな。離せるか？」

「いいのかい？」

「どうせ名乗ったんだ。今日はもう何もしたくないよ。」

「了解。」

基はクスッと笑って左手の親指を立てると更にアクセルを踏み込む。後ろの四人が寝ていてくれてよかった。俺は何気なくステレオのスイッチを入れた。もちろん、さっきの妙なカセットとは別のものと入れ替えて

だ。今度のは一応まともな曲が入っている筈。

衝撃的なオープニング、一転して緩やかなピアノのメロディ。俺は少しボリュームを下げた。マーチはピアノの音に合わせるかのように軽い加速感の後、ゆっくりと柏木との差を広げ始める。この曲はたしかシューマンのピアノ協奏曲。どうしてこういうカセットがアニメの歌とかと一緒に並んでいるのか、基の趣味が根本的などころでどうしても理解できない。まあ、人はそれぞれだから構わないと言えば構わないのだが…。

「あのおじさん、このまま大人しく引き下がるかね。」

基はルームミラーをちょっと直してそうつぶやいた。

だいたいと同じスピードを出すにしても、日頃からかっ飛んで走っている基と、たぶん普段は運転手に運転させているだろう柏木とでは自然にドライビングテクニックに差が出るのは仕方がないことだ。ま、あまり無理して事故でも起こしてなきゃいいんだけど…。

「あの様子じゃ、うちにまで押しかけて来るんじゃないか？」

「考えられなくはないね。」

だが、俺には手が出せまい。証拠が無いとはいえ、俺が奴の弱みを握ったことには変わりがないし、下手をすりゃ自分の身が危ないということくらいは柏木の方がよく知っているだろうさ。

「このままうちに向かってくれ。」

「おい、そんなことしたら…。」

「いいんだ、初めからそのつもりだったし、いい加減に謎の人はおしまいにしようと思ってさ。フェルマーを怒らせた時、俺はそういう風に決めたんだ。」

「まあ、瑞理がそれで納得しているんなら仕方ないけど…。」

まだ何か言いたそうだったけど、基はそれ以上は何も言わなかった。また、どうせ何か言っても俺は聞かなかったと思うが…。

「うーん、ねえ、何かあったのお？」

希夜が寝ぼけた声を出す。

「どうもしないよ。もうすぐ着くから、もうちょっと寝てな。」

「うん。」

ちえっ、いつもそれくらい素直だったら可愛いのに。」

「瑞理、最近なんか変わったな。」

「ああ、そうかもしれない。」

「でも、そういう瑞理の方がいいと思うよ。」

そうかな…？俺はちょっと照れて後ろを振り返る。既に後ろのヘッドライトは完全に消えていた。

SET IV 「マーチはコンチェルトに乗って」

SET V 「イオールの秘密」

幽霊屋敷…、それがこの樫羽生化学研究所の通称だ。この街に住んでいる人間だったら、そう言えば大体すぐ分かってくれる。それほど有名な建物だから、一握りのある種の人間たちにとっては格好の興味的になってしまっている。

この街の住人である希夜なんかは、その幽霊屋敷の中にいるというだけで興奮まくっていて、うるさくて仕方がない。そんな状態だから俺も基もなるべく希夜には関わらないようにしていた。

まだ夜が明けていないような時間帯なので研究所には誰もいない。基が人数分のコーヒーを入れてきたのを受け取りながら、俺はフェルムとフェルマーの様子をそれとなく窺う。俺は隠すのも嫌だし、誤解されるのも嫌だった。どうしてもこの場ではっきりさせようと思う。

「ねえねえ、基くんもこの人なんですよ。ここで何を研究しているのか教えてよ。」

ほうら来た…。コーヒーを渡す時についに基が捕まってしまった。もうこうなったら最後、希夜は自分をゴシップ雑誌の記者かなんかと勘違いしているんじゃないかと思うほどしつこくなる。まず、普通に振り払うことなんかできないだろう。

「教えられないよ。うちの所長に怒られるからね。」

基が親指だけで俺のことを指差した。基にいきなり所長なんて言われてしまうと、普段言われ慣れていないもんで思わず赤面してしまう。

「じゃあ、そろそろ二人の正体を教えてもらおうか。」

俺はそんな照れくさを隠そうと、少し真面目な表情を作ってフェルマーに話を振ってみる。こういう時にポーカーフェイスを作るのは昔から得意なんだ。

フェルムは一瞬ビクッと反応してから、場を見回して苦笑いをした。自分から次元扉を開いて見せたことを思い出したらしい。だが、フェルマーの方は違っていた。緊張の色を露骨に顔に出しながらも、もう心は決まっているようで静かに口を開き始めた。

「約束ですから…。でも、今さら話すことも少ないと思います。」

「というと…？」

「あたしたちの能力のすべてはあなたに見せてしまったということです。」

まあ、フェルムが俺たちの目の前でテレパシーと次元扉という二つの能力を見せてはくれたが、それで二人のすべてを知ろうというのは少々極端な話だ。

「じゃあ、質問を変えよう。君たちは出身を教えてください。君たちはどこからここに来たんだ？」

「イオールス…惑星イオールスです。」

べつにそんな天文学に詳しい訳ではないので俺が知らないだけなのかもしれないが、イオールスという名前には覚えがない。もしかするとその名前は彼らの星での呼び名で地球上では違う名前なのかもしれない。

フェルマーはそんな俺の疑問が分かっているのか、軽く頷いて静かに目を閉じた。すると、部屋の空間がまるで意思を持ったかのように急に無限大の広さを持ちはじめた。上下左右の区別がなくなり、不思議な光の点が空間のあちらこちらに散らばる。

これは宇宙だ！俺はいま宇宙空間にいるんだ。俺の周りにみんなも浮いている。しかし、不思議なことに浮遊感はいっっぽちもない。それは他のみんなも同じようだった。

「サイコビジョン…。」

自然とこんな言葉が口をつく。これはたしか昔読んだ小説に出てきた言葉だ。よもや自分がこんな体験をすることになるとは夢にも思わなかった。

「わあ…。ねえ、ねえ、ロマンティックねえ…。」

ちえっ、何がロマンティックなもんか。希夜は単純に喜んでいますが、俺は地面とお天道さんの無い場所には一分でもいたくない。はっきり言って宇宙空間なんぞ人間の存在する所じゃないと思っている。そんな俺の心の声が聞こえたのか、少しずつではあるが全員がある方向へ動いている。それと同時にフェルマーの音が周囲に響く。まるでエコーでもかかっているかのように聞こえる。

「この地球より遥か彼方に位置する惑星。それがあたしたちの故郷イオルスです。」

数千の星の中から青紫色の地球によく似た惑星が迫ってくる。たぶん、これがイオルス。初めて見る筈なのになんだが懐かしいような変な気分になってくる。

ぶつかるっ…と思った瞬間、目の前はビルの立ち並ぶ都会の風景へと変わっていた。

「ここ惑星イオルスには、イオルス人とユニックス族と呼ばれる二種類の人類が共存しています。」

一つの惑星に二種類の人類？

「どういうことだ？」

「あたしたちユニックス族は、進化の過程が他の一般的な人類とは根本的に違っています。あたしたちは植物から進化した種族なのです。」

「植物から…？」

ゆっくりと風景が動く。高層ビルの向こう側に草原が広がっている。

草原を見た途端に何故かまた懐かしいという感情が湧き上がってくる。どうしてだろう…、この風景を見るのは初めての筈なのに…。

「ここはユニゾーン。ユニックス族の故郷です。ここであたしとフェルムは生まれました。」

ああ、なんとなく分かってきた。この瞬間に懐かしいと感じているのはフェルマーなんだ。俺はフェルマーとシンクロしているのか…。そう考えるとフェルマーの感情が俺の中に流れてくるのが分かるような気がする。

それに、俺はフェルマーたちが植物から進化した種族と聞いてもさほど驚いていなかった。むしろ、やっぱりそうだったかという気持ちの方が強いかもしれない。たぶん、この感情もフェルマーの影響を受けているからなんだろうな。

「フェルマー、ということは身体の構造とかは俺たちと違うのか？例えば光合成でエネルギーを得ているのか。」

フェルムの動揺している様子が何故か伝わってくる。

「フェルム、俺には柏木と同じようなことをするつもりはないよ。単純に好奇心で聞いているだけなんだから。」

「どうやらあなたには分かってしまうようですね。地球人であたしたちとここまでシンクロしたのはあなたが初めてです。本当に今まですいませんでした。質問の回答ですが、光合成はしようと思えばやれないことはありません。でも、この形態ではあなた方と何も変わりませんよ。普通に食事もしますし、こうやってコーヒーだって飲みますから。」

たしかに…ね。しかし、世の中には色々な生命体がいるもんだ。まさか植物からここまで進化した種族がいるとはね。柏木があんな必死になって追っかけてきた訳だ。こんなのが世間に公表されたら、進化論が根本的にひっくり返るかもしれない。

「ついでに言えば、あたしたちがここで生活している時はまだ一人でした。フェルムとフェルマーではなく、フェルンという名の子どもだったのです。」

「どういうこと？」

「どういう意味なんだ…と言おうとした横から希夜に同じ言葉を先に言われてしまった。希夜ともシンクロするのはちょっと勘弁願いたい。」

「あたしたちは二十歳までは幼性と言って性別がありません。それが二十歳の誕生日が近づくにつれて自我分裂を起こして、やがて精神が異なる二つの人格が形成され、誕生日に身体が分裂するのです。」

「それでそんなにそっくりなのか…。」

「でも、地球人の双子とはちょっと違います。二人は似て非なるものですが本質は同じなのです。」

「ん…？」

「つまり、もう少し分かりやすい言い方をすると、ある物に対する結論は俺とフェルマーでは常に同じなんだけど、そこへたどり着くための過程は必ず違うんだ。むしろ正反対と言った方が正しいかもしれない。」

フェルマーが言葉に詰まったのを感じてフェルムが補足してくれた。ということは、彼もフェルマーとは違った意味で俺たちに説明してくれる気になったということなんだろうな。

俺はもっと色々な質問がしたかったが急に気が変わった。俺は根っからの文系人間だし、どうせこれ以上は聞いても無駄というもんなんだと思う。もっとも最初は基がいるからひょっとして聞き出してあげば何かの役に立つだろうと思っていたんだけど、なんとなく聞く気がなくなった以上このままそっとしておこうという気のほうが強くなっていた。これもシンクロのせいなのかな。

「結局は寂しいんですよ。一つの心を二人で分け合って、いつも何かを捜して旅をしている。」

「イオルスには帰らないのか？」

「帰れないんだ。」

そう言って、フェルムは哀しそうに笑ってみせる。

気がつくといつの間にか研究所の居間に戻ってきていた。みんな、さっきと同じ姿勢でソファに座っている。

「一度イオルスを出たら、死ぬ時まで帰れない。それが種族の掟だから。」

なんとなくフェルムのイメージが一つにまとまらない。最初、梨亜夢の前でぶつかった時のフェルム。そして、いま目の前で喋っているフェルム。俺にはどれも違うフェルムに見えて仕方がない。

「フェルム、お宅って面白いのな。色々な顔を持っていて、まるで何人ものフェルムがいるみたいだ。」

「何だよ、それは。畜生、あんたをちょっとでもいい奴だと思った俺が莫迦だった。」

フェルムは拗ねてパイと横を向いた。フェルマーは笑いながら、そんなフェルムを小突いている。和也は煙草に火を付けようとして、大受けして馬鹿笑いしている。希夜なんか相変わらず大騒ぎしてうるさい。基は基でニヤニヤして、何も言わずに成り行きを楽しんでいる。

俺は…、俺は困ったことに、こんな連中を見ているのが気に入ってしまったらしい。人間嫌いと言われているこの俺がだ。

「俺はさ、自分のこの目を見たものは何でも信じる主義なんだ。だから、お宅らの言うことは全部信じられる。」

俺はそっとフェルムに右手を差し出していた。

「何故ならフェルムがいま俺の目の前にいるからね。」

「俺もあんたから見れば変わっているんだろうけど、あんたも相当変わっているよ。あんたみたいな地球人

は初めてだ。」

フェルムの右手も出された。その上にフェルマーの右手が重ねられる。和也の、希夜の、基の、みんなの右手が俺の右手の上に重ねられた。

笑いが自然にこみ上げてくる。俺は一人一人の笑顔を見ながらゆっくりと思った。

ああ・・・、厄介な仲間が増えた。

SET V 「イオルス秘密」

S63. 22. JAN <<H17. 23. DEC>>

SET VI 「そんな梨亜夢の午後」

珍しく陽射しが強い。うっすらと額に汗がにじんでくるくらいだが、たまに思い出したように吹いてくれる風が気持ちいい。もう冬がそこまで来ているのを、研究所からいつものように梨亜夢に向かう中この目ではっきりと認めた。街の樹木は少しずつ冬支度を始めている。

フェルマーたちから地球の人類史が根底から覆るような秘密を聞いた翌日、フェルムは行き先をどことも告げずに旅立って行った。和也が一応引きとめたいらしいが、あいつは笑って出発したいらしい。必ず帰ってくると言っていたそうだが、いつのことになるかは分からない。

たぶん、フェルム自身だっていつ帰ってくるのかなんて分かってないんじゃないかと思う。フェルマーによると、分裂した二人が同じ空間にいることは稀なんだそうだ。従ってフェルマーがこの街に残ると決めた以上、フェルムが旅立つことは必然なんだそうだ。

そのフェルマーだが、なんか強引に希夜のところに居ついたらしい。最近やたらと一緒に現れる。どうも希夜に悪い影響を受けている様子で、希夜が二人になったみたいに思えて俺としちゃあまりいい気はしないんだが、こればかりは俺が口を出してもなんともならないだろう。

「榎羽さん、ボーッとしていると冷めちゃいますよ。」

麻里ちゃんがいつものようにクスクス笑いながら、いつの間にか俺の横に立っている。いつもながら明るい娘だ。

「たまにはアイスもいいんじゃないかなって、今日は珍しく暑いからね。」

「嘘ばかり、入れ直しますね。」

カウンターではマスターが暇そうに欠伸をしている。要するにこの店はいつも暇だということだ。だいたい、マスターにこの店を繁盛させようなんて気がこれっぽちもないせいなんだけどね。

「だけど、だからこそ俺はここに来るのかもしれない。」

「瑞理ちゃん、そういやあ、この前のレポートだけど、あれ、なかなか評判良かったよ。連中が是非とも水曜日に来てくれって言った。」

「まあ、考えとくよ。」

先週の火曜日に幽霊屋敷の正体をレポートした物をマスターに渡しなが、俺は自分の職業を明かしてみせた。マスターは「ふーん」と言ったきり、それ以上は何も言わなかった。どうも半分は感じていたような気がする。

フェルマーの件にしても、あれ以来口にする様子もなく、俺としちゃ肩透かしをくらったような気分なんだが、たぶんこれはこれでそういうもんなんだと思うことにした。

「どうぞ、お待たせ致しました。」

「はい、お待ちしております。」

「な、何なんですか……。」

一瞬、目を丸くして、その後に始まるいつものクスクス笑い。いや、今回はそんなもんじゃないな。いつもよりもっと派手に笑い続けている。

「やだ一つ、榎羽さん、おかしい。」

苦しげに笑い続けながら、それでも手馴れた手つきで新しく入れ直したブレンドを二つテーブルに置いていく。

「ん……？」

「実は…、あたし、樫羽さんに相談に乗ってほしいんですけど…。」

俺の向かい側に座ると、両手を顔の前で合わせる仕草。相変わらずドナルドダックのエプロンがよく似合っている。

「マスター、ここで一人サボってる人がいるよお。」

「どうせ暇だから構わないよ。」

マスターはこっちを見もせずそう答える。まったく、よく一日中同じ新聞を読んでいられるもんだよ。

「もう、樫羽さんったら。」

「悪いけどさ、俺はよろず厄介事引受業じゃないんだけどな。」

「分かっていますって、そんなんじゃないかと、樫羽さんに聞きたいことがあるの。」

俺はちょっと大げさに肩をすくめてみせた。そんなことで諦めるとは思ってないが…。

「聞きたいこと？」

「うん、あの…。」

あっという間に顔が耳まで真っ赤になる。急に下を向いて言いにくそうにしている麻里ちゃんの様子で俺はすぐにピンと来た。ひょっとしたら俺がお節介を焼く必要もないかもしれない。

上手い具合に梨垂夢の外に基の白いマーチが停まったのが見えた。最近、研究所の方で何かあると基がすぐに迎えにくる。いい傾向なんだか悪い傾向なんだか…。ま、とりあえず今日に限って言えばいいタイミングだったな。

「悪いね、どうやら本業の方で急用らしい。」

「えっ？」

振り返った麻里ちゃんの目にはマーチから降りてきた基の姿が映った筈。

「瑞理、啓さんがすぐに戻ってきてくれって。」

あの莫迦…、こんな小さい店でそんな大声をを出すなって。小声で喋っていても全部聞かれるっていうのに…。

「ほらね。という訳だから、俺の代わりにあいつを置いていくよ。たぶん俺に相談するより役に立つと思うよ。」

「ちょ、ちょっと、樫羽さん。違うって…。」

慌てて立ち上がろうとする麻里ちゃんを押しとどめて、基に片手を上げて合図する。

「基、ちょっと。」

「ん…？」

そんな俺の様子に気がついた基を無理やりカウンターの隅に引きずっていき、彼女には聞こえないくらいの小声で囁いた。

「基、悪いが俺の代わりに彼女の話聞いてやってくれ。了解？」

「な、何だよ、いきなり。」

「惚れたんだろ。彼女に自分のいい所を見せてみろって。」

「わ、分かったよ。」

「じゃあ、キーを貸しな。二時間経ったら迎えに来てやるよ。」

呆気にとられている基と、真っ赤になってモジモジしている麻里ちゃんを横目で見ながら店を出る。どうせ今の小声の会話もマスターには聞こえてんだらうから悪いようにはしないだろう。もう一度店内に目をやって、俺はマーチのイグニッションキーを回した。

俺が余計な世話を焼くより、本人同士で好きにさせたほうがいいだろ。二人が上手くいった時には何かお祝いしてやんなきゃな。

俺はふと空を見上げながらそんなことを思う。青い空に白い雲が不思議な模様を描く。目の前を名前も知らない鳥が横切っていった。

SET VI 「そんな梨垂夢の午後」

『フェルムとフェルマー』

—惑星フェリア・シリーズⅢ—

S63. 24. JAN <<H17. 23. DEC>>